「よこはま子ども国際平和スピーチコンテスト」

～国際平和のために、自分がやりたいこと～

今年で27回目を迎える同コンテスト。横浜市内の各小学校・中学校・特別支援学校から約4万人の児童生徒が参加し、各区予選会などで選ばれた代表者による本選が7月24日と25日に行われました。2015年に国連で採択された「持続可能な開発目標」（SDGs）に関連付け、児童生徒ならではのさまざまな視点から、国際平和に対する熱い思いを発信。そこで、中区・西区の代表者の作品を紹介します。

※氏名上部のタイトルは本紙が付けました。



小学校の部出場者



中学校の部出場者

中区
小学校の部

“自分”を大切に

本牧南小学校　5年
サッキー　アイリージェイドさん



私の見た目は、この通りみなさんより肌の色が黒いです。私の父は、アメリカ人です。母は、日本人とフィリピン人のダブルです。だから、私の見た目は、外国人です。

前の学校での入学式、外国人は私一人。先生や友達に言われた言葉「日本語、しゃべれるの？」この言葉に深く傷つきました。先生や友達にとって悪気がないことは分かっています。でも、私は日本で生まれたし、日本語も話せるし、話していることも全部分かります。それは、当たり前のこと、なぜそんなことを言うのだろう、と思っていました。そして、ある日友達から、今度は、「日本語うまいね。」と言われました。かなしくもないけど、うれしくもない複雑な気持ちでした。でも、いやでした。日本人だし、日本語も話せるし、見た目だけで言わないでほしいと思いました。とてもつらかったです。学校を休みたいと思ったこともあります。でも、休みませんでした。それは、母の言葉をずっと大切にしてきたからです。「自分と同じ人はいない他の人に自分の存在は変えられない。どんなにつらいことがあっても、自分を大切にしなさい！」この言葉を、いつも心の支えにしてきました。

母も同じ目にあったことがあります。でも母は、「嫌だとは思わなかった。逆に、その言葉を話題にして仲良くなった。」と話してくれました。私は、そんな母がすごいと思いました。そして、自分らしく生きている父や母を誇りに思っています。だから、負けずに今まで自分を大切にすることができました。

友達と会話をしている中で、私自身が人のことを見た目で分けていることに気がつきました。例えば、遊びの中で男女に分けたり、色で男女に区別したりしている自分がいたのです。また、ある日の道徳の授業では、黒のイメージを悪くとらえている自分もいました。見た目で判断されて、嫌な思いをしたのに、自分も他の人に同じ思いをもっていたのです。

世界には、いろんな人がいます。肌や目の色、男女など見た目がみんなそれぞれ違います。私は、見た目だけで判断しない人間になりたいと改めて思いました。

私たちは皆、同じ人間です。同じ人として母のように誰とでも仲良くなれる人になりたいです。「同じ立場で話し合ったり、考えたりしたい」「その大切さを伝えていきたい」と私は思っています。それが、平和な社会に近づく第一歩だと私は、強く思います。

私が大切にしていること



西区
小学校の部

自然の大切さ おどりで

西前小学校　6年
矢島　志渚さん



みなさんは、日常で自然や植物にかかわっていますか。私は毎日関わっています。私は、三さいのころからフラダンスを習っていて、もう九年になります。その中で気づいたことがあります。それは、フラダンスはただおどっているだけではないということです。フラダンスは一つ一つのおどり、動きにしっかりとした自然の意味がこめられているのです。だから、おどっている曲が一つの自然に関わる物語になっています。前にフラダンスの大会でおどった曲でいうと、ハエが出てくるお話でした。ハエがおばちゃんから、にげていたり、ハエがおばちゃんと戦っていたりと、色々な自然との関わりのあるストーリーがありました。そのストーリーを全部の体を使って表現するのです。

例えば、これはお花です。これは、海です。これは、ハエです。これは、鳥です。

私はこのように自然を表現するフラダンスが大好きです。

ですが、そんなきれいな自然や植物、海がはかいされていたり、きたなくされていることが現状です。最近、フラダンスの発しょうの地ハワイでもサンゴの白化現象という問題があるそうです。様々な要因がえいきょうしているようですが、その一つが人間のつける日焼け止めと言われています。とても色あざやかできれいなサンゴが真っ白になり、見た目もきたならしく見えていることに、怒りを感じました。そこで、私は海のきれいさや、自然、植物のおもしろさをフラダンスのショーやイベントでおどって広め、自然や植物、海がどれだけ大切なものなのかを知ってもらいたいのです。

しかし、フラダンスで自然のことを伝えたくても大変なことがあります。私はフラダンスの先生によく注意されていました。なぜなら自然をイメージしながらおどっていなかったからです。それから私は自然をイメージしておどるようにしました。そしたら先生から、

「上手くなったね。」

とほめてもらうことができました。私はそんなフラダンスをずっと続けていきたいです。なぜなら、おどり続けることで多くの人に自然の大切さを伝えたいからです。私はフラダンスをおどることで自然と共に生きていきたいと思います。

「そんなことで、自然などを守ることができるの。」

と思う人がいるでしょう。でも、これだけでもいいのです。このように、ちょっとでも自然と関わり、色々な人に知ってもらうことで、大切さを知ってもらえると思います。なので、みなさんも、自分でできる、自分なりの方法で、自然を守っていきませんか。

A ohe hana nui ke ali'i（ア オヘ ハナ ヌイ ケ アル）

みんなで力を合わせればなんでもできる。

私だからこそ伝えられる自然の大切さ

中区
中学校の部

身近な食の問題から

仲尾台中学校　2年
篠原　天音さん



みなさんにとって「食事」とはどのようなものですか。私の学校では、給食とは少し違った、デリバリー型の給食としてお弁当が配られます。食中毒防止のため、おかずは冷たくごはんと味噌汁だけ温かくなっています。私の周りには、おかずが冷たいからと言って「食べたくない」と文句を言ったり、食べたいものだけ食べて残したりする友達が少なくありません。私も小学生の頃、給食はおいしいけれど、周りの友達が残しているから自分も残していいや、という軽い気持ちで、パンやおかずを何も考えず残していました。しかし、あることをきっかけに今では毎日残さず食べています。

小四の夏休み、私は家族旅行でフィリピンに行きました。街を歩くと、やせほそった体で近寄ってきた人達がタバコや食べ物を求めて私たちにものごいしてきました。最初は正直怖かったし、あまり関わりたくありませんでした。しかし、中には自分と同い歳くらいの人達や、もっと小さな子供たちが私を見つめてきたことが心にひっかかり、何か自分にできることはないか考えました。ですが、それ以前にものごいしてくる人が多すぎて、結局は何もすることができませんでした。この家族旅行をきっかけに、私の食に対する気持ちは変わりました。「残すことは当たり前」ではなく、「食べられることは幸せなこと」であり、目の前にある食がどんなに幸せなことであるか、飢餓に苦しむ人を実際身近に感じたことで学びました。みなさんにも少なからず好き嫌いがあると思います。私にも好き嫌いは沢山ありました。しかし、この経験をきっかけに食べられることへの見方が変わり好き嫌いを減らすことができました。みなさんも、少し意識を変えるだけで嫌いだったものを好きになれたり、食の良さに気付くことができると思います。

今現在、飢餓は世界で深刻な問題となっています。私は、食事だけに限らず、ものを大切にしたり、家にある残り物をアレンジして料理を作るなど、私なりにできることを取り組んでいます。将来的には得意な英語を生かして、海外でのボランティア活動に参加したいと思っています。そして沢山の人と英語を通してコミュニケーションをとり、少しでも飢餓の問題をなくしていけるように考えていきたいです。みなさんも、まずは食の意識を変えることから始めてみませんか。

私の思う本当の幸せ



西区
中学校の部

戦争を風化させない

軽井沢中学校　3年
前原　花凛さん



沖縄に米軍が上陸し、たくさんの尊い命が失われたあの戦いから、七十八年という長い年月が経ちました。

今日までの時間が、生存者の傷を癒すことはなく、未だに多くの人々が悲しみ、その被害を訴えています。

私は、戦争を経験していません。当時の惨状を見ていませんですが、戦争が、どれだけ恐ろしいものか、どれだけ多くの人を悲しませてきたのかという事を知っています。

修学旅行で訪れたガマには、爆弾によって吹き飛ばされた破片や、粉々になった食器など、遺品の一つ一つが凄惨さを物語っていました。また、ひめゆり平和祈念資料館で見た、二百余りの犠牲者の中には、私と同じ年齢の学徒が詳細不明で亡くなっていました。

自ら命を断った人、特攻隊として国のために命を落とした人、逃げ場を失ってしまった民間人。

想像するたびに、本当にあったことなのかと改めて思います。

普段、私が当たり前のように生活していることは、特別なことなのです。

戦争が人々から奪ったものは、戦没者の命だけではありません。育まれるはずだった未来の命も、消し去っているのです。

世界が平和になるためには、伝え続けることが必要です。将来、二度と同じ過ちを繰り返さないためにも、私たちは、一九四五年に沖縄で起きた出来事を正しく理解し、次の世代へと発信していくことが大切です。

被害者の平均年齢は上がり続け、戦争の恐ろしさを語ることができる人は限られてきています。だからこそ、今を生きている私たちが、自分には関係ないからと言って目をそむけるのではなく、平和のために向き合うべきです。

私は、修学旅行で学んだ平和の大切さを、家族へと伝えました。

このように、自分が経験したことや、聞いたことを身近な人へと伝えていくだけで、戦争について知る人が増え、平和と向き合うことができると思います。

見て、聞いて、考えて、伝える。

この四つを続けることが平和への一歩へと繋がるのではないでしょうか。

そして私は、多くの人々が様々な違いを乗り越え、戦争のない世界を目指していきたいです。

伝え続けること